

5.1 デジタル基盤“Serendie” Digital Platform “Serendie”

デジタル基盤“Serendie”とプロジェクト推進基盤

Digital Platform “Serendie” and Project Promotion Infrastructure

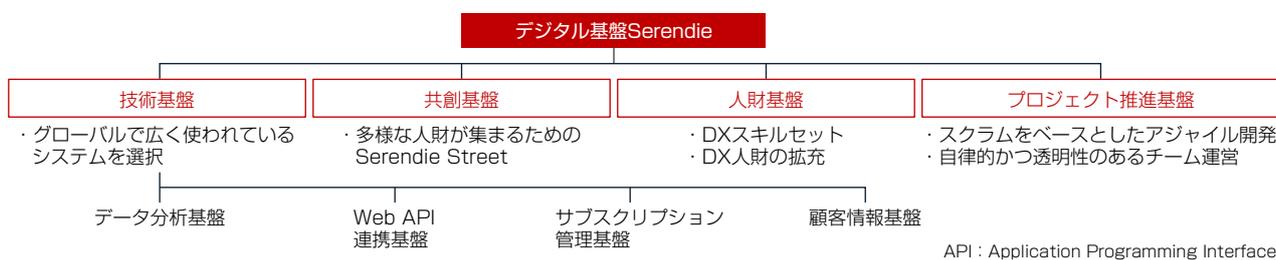
今日、顧客課題・社会課題の多様化や、技術の進化に迅速に対応するため、企業には事業構造の変革が必要である。しかし、従来のアプローチでは、市場変化への柔軟な対応が困難であり、また、部門横断的な連携も難しいため、価値創出の阻害要因になっていた。

当社は、この課題の解決を図るため、デジタル基盤“Serendie”を構築した。この基盤では、効果的な価値創出を高速に実施することで、DX(Digital Transformation) 推進を加速すると同時に、マインドセットの変革も目標と

している。

Serendieは、技術基盤、共創基盤、人財基盤、プロジェクト推進基盤という四つの要素から成り、それらが相互に連携している。特に、プロジェクト推進基盤が持つノウハウやソリューションが、価値創出への貢献を果たしている。

引き続き、部門間や顧客との共創による価値創出の加速及びマインドセットの変革を更に深めていく。



デジタル基盤Serendieと構成要素

プロジェクト推進基盤を支えるソリューション(1) : Serendieサービスデザインプロセスガイドライン

Solutions Supporting Project Promotion Infrastructure 1: Serendie Service Design Process Guidelines

イノベティブなサービス創出には、構想段階からユーザー視点を取り入れて、事業性や技術的実現性とユーザー体験を両立させることが不可欠である。しかし工程ごとに担当者が引き継ぐ従来の手法では、各段階でユーザー視点が希薄化し、サービス創出に対するアジリティーや顧客満足度の低下といった課題が発生していた。

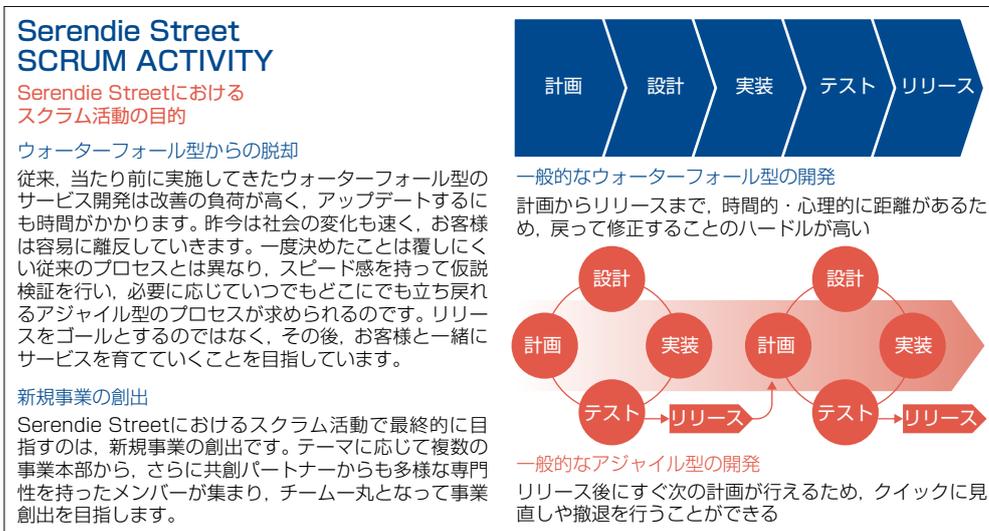
この課題の解決に向けて、当社はアジャイルマインドセ

ットを取り入れた“Serendie サービスデザインプロセスガイドライン”を確立した。このガイドラインは、サービス創出時に実施するプロセスを提示するものである。実施するステップの順番を規定せず、どのステップから着手してもよく、必要に応じて実施済みのステップに後戻りもできる、という柔軟なプロセスに特徴がある。

このプロセスを適用することで、刻々と変化する状

況に合わせて、適切なサービス創出プロセスを設計することが可能になった。また、異なる専門性を持つメンバーが同時に議論するアプローチを推奨しており、多角的な視点からの革新的なサービス創出を行えるようになった。

今後もガイドラインの継続的改善と多様なサービス創出への適用拡大を通じて、マインドセット変革を加速していく。



Serendieサービスデザインプロセスガイドライン(抜粋)

プロジェクト推進基盤を支えるソリューション(2) : Serendie Design System

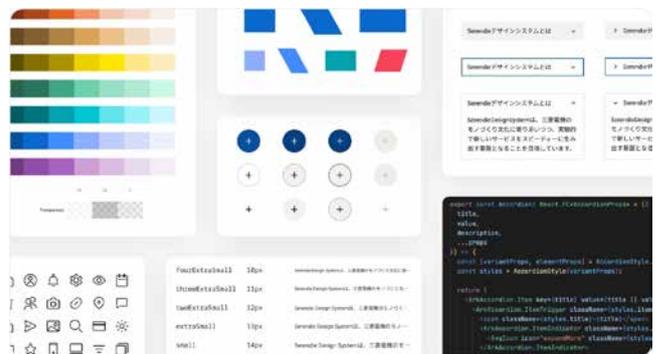
Solutions Supporting Project Promotion Infrastructure 2: Serendie Design System

多様なサービス創出を、高速かつ高品質に実施するためには、デザインと開発の緊密な連携、そして共通資産を効果的に活用する仕組みが不可欠である。これまでは、デザイナーが創造するデザインと、エンジニアが設計・開発するソースコードの間に乖離(かいり)が発生し、デザインの意図が正確にソースコードに反映されない、正確に反映するために多くの時間が費やされる、といった課題があった。

これらの課題を解決するために、当社は再利用可能なUI(User Interface)コンポーネント群と明確なガイドラインを体系化した“Serendie Design System”を構築した。このソリューションは、Figma(注)のデザインツールとReact(注)などのコードを連携させることで、デザイナーとエンジニアの間で、共通認識を持ちながら開発を進められる環境を実現している。その結果、UI開発プロセス全体の効率が飛躍的に向上し、開発にかかる時間も大幅に短縮された。さらに、デザインシステムを組織全体で共有す

ることで、成功事例や蓄積されたノウハウが全社的に波及するという相乗効果も得られた。

今後はUIコンポーネントの更なる拡充とドキュメントの充実化を進めて、より多くの開発者が活用しやすい環境を整備していく予定である。



Serendie Design System

プロジェクト推進基盤を支えるソリューション(3) : Serendie対話型マルチAIエージェントサービス

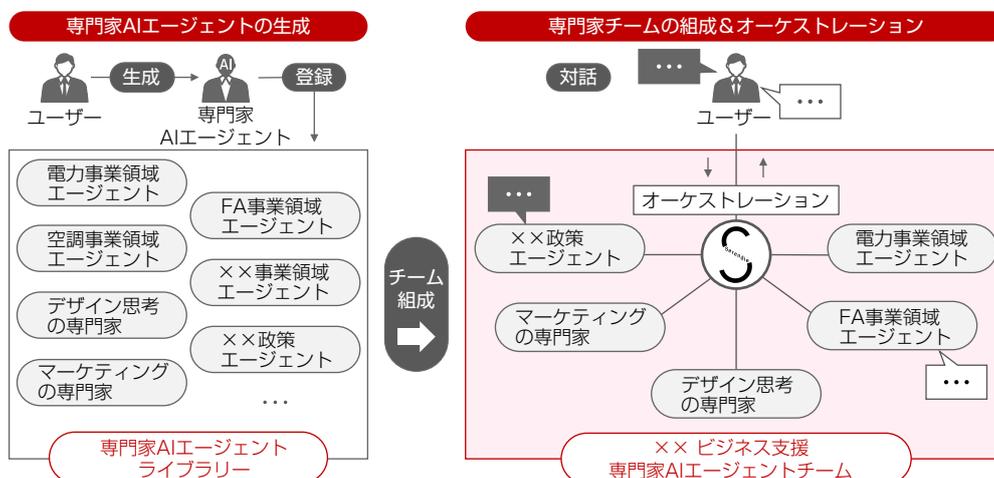
Solutions Supporting Project Promotion Infrastructure 3: Serendie Interactive Multi-AI Agent Service

革新的な事業アイデアの創出には、市場や顧客課題・社会課題に関する多様な情報を迅速に分析し、多角的視点から仮説を構築することが重要である。従来の仮説構築プロセスでは、人の経験や知見に依存する部分が多い、膨大な情報の収集・分析に時間と労力が必要であるなど、アイデア創出が迅速に行えないという課題があった。

この課題を解決するため、当社は事業化に向けた市場情報収集、顧客課題・社会課題分析、収益性や競合他社調査などに、生成AIを活用するソリューションを構築した。このソリューションは、複数の専門知識を持つAIエー

ジェントが連携しタスクを効率的に遂行するためのオーケストレーション技術によって、時間を要するタスクを高速に実行し、従来のプロセスでは難しかった革新的な事業アイデアを短時間で創出可能にした。複数の事業仮説を簡単かつ高速に創出することで、従来必要であった時間と労力を、個々の事業仮説の深化に活用することが可能になった。

今後は、AIエージェントの専門性向上、当社の様々な事業領域に関する知識を蓄積していくことで、更に精度の高い事業仮説の創出を推進する予定である。



Serendie対話型マルチAIエージェントサービス概要

プロジェクト推進基盤を支えるソリューション(4) : Serendie SPOT

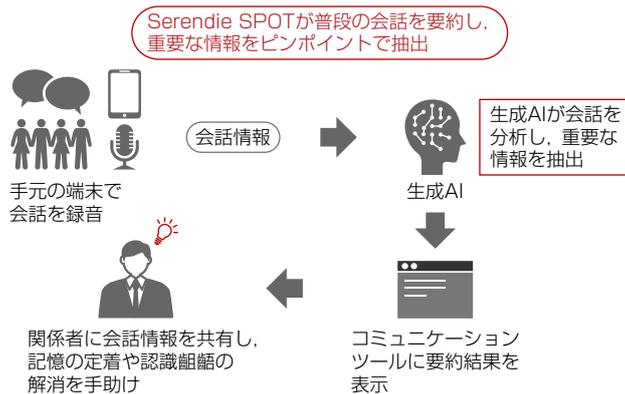
Solutions Supporting Project Promotion Infrastructure 4: Serendie SPOT

日々のオフィス業務では、プロジェクト推進に関わる重要な情報が、同僚との非公式な会話の中に含まれることは少なくない。しかし、非公式な会話は記録されにくく、記憶の欠落や認識のずれといった課題を引き起こして、プロジェクトの円滑な推進を妨げる要因になっていた。

この課題を改善するため、当社は立ち話を主とした口頭コミュニケーションの記録・データ化を行うソリューション“Serendie SPOT”を開発した。このソリューションは、会話を録音し、その内容を生成AIが重要度を判断

した上で要約(文字化)し、関係者に共有可能にした。このソリューションの導入によって、非公式な会話からも重要な情報を漏らさず記録することで、記憶の復活、リアルタイムな情報共有及び認識齟齬(そご)の解消を実現した。

今後、オフィス内で働く人の位置情報との連携、音声認識技術の更なる精度向上、他のプロジェクト管理ツールとの連携機能の強化によって、よりシームレスなコミュニケーション環境の実現を目指す。



Serendie SPOT概要

DICアジャイル開発ガイドラインとQMSの確立

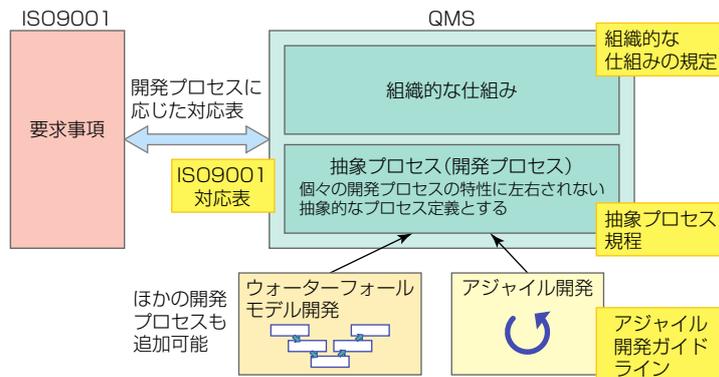
Establishment of DIC Agile Development Guidelines and QMS

ソフトウェア開発の分野では、多様化する顧客課題・社会課題に対して、サービスの創出・適用を高速に実現するため、アジャイル開発手法の適用要求が高まっている。

DXイノベーションセンター(DIC)では、アジャイル開発手法を適用する上で、スピード感と品質の両立という課題に対して、品質マネジメントシステム(QMS)及びDICアジャイル開発ガイドラインを確立した。アジャイル開発手法に適合したQMSとして、完成の定義(Doneの定義)のベースライン提示と品質保証部長によるレビュー、テスト設計方針の明確化とDoneの定義への反映、スクラ

ムチームへの品質技術者参加によるDoneの定義の運用状況確認を前提として、出荷権限をスクラムチームの一員であるプロダクトオーナーに委譲することで、開発のスピード感と品質を両立した。既に当社のデジタル基盤“Serendie”でのソフトウェア開発にも適用し、その効果を確認している。また、このQMSは国際規格“ISO9001”の認証も取得済みである。

このモデルを、当社のDX推進での品質保証の中核として、顧客満足度の向上を図っていく。



DICアジャイル開発ガイドラインとQMSの構成

近年、AI活用、DX推進が企業の競争力を左右する重要な要素になっている。しかし、現状では当社の各事業本部の部門ごとに独自のクラウド開発環境が立ち上がっており、その中には事業で利用されているものも存在するが、小規模なクラウドが多数存在するため、知識やノウハウがサイロ化してしまっている。このような状況では、AI活用の推進が効率的に行えず、試作環境の契約がバラバラであることから、リソースの無駄遣いが生じている。

さらに、個人レベルでAI開発に取り組みたいと考えても、部門間の壁が存在し、必要な環境を入手することが難しいのが現実である。このため、AI人財を増やすための環境が整備されていないことが課題になっている。

そこで、私たちは“Serendie Bootcamp”（図1）という新たな取組みで、必要なAIアプリケーションを簡単に開発できる試作開発基盤を提供し、最新AI技術を常に試用可能な環境を整えている。

具体的には、AWS^(注)、Microsoft Azure^(注)、Google Cloud^(注)といったマルチプラットフォーム（図2）での試作が可能になり、各プラットフォームのベンチマークを行うことができる。これによって、参加者は自らのプロジェクトに最適な環境を選択し、効率的にAI開発を進めることができる。また、開発環境の費用はAI戦略が負担するため、参加者は経済的な負担を気にせず試作開発に取り組むことができる。

Serendie Bootcampでは、検証開発プロジェクトが複数人のチームでの利用だけでなく、個人の学習にも活用できるように設計されている。これによって、AI人財の育成が促進されて、企業全体のデジタルスキルの向上につながる。また、成果物を共有するためのリポジトリ（GitHub^(注) Enterprise）を提供し、参加者

同士での成果物の共有を可能にする。これによって、知識の共有が進んで、サイロ化の解消にも寄与する。

リリースからわずか1年間で累計300件の利用申請があり、マルチAIエージェントを用いた社内業務システム用のチャットボット、生成AIによる生産現場の効率化ツール、知的財産分野での生成AIの特許業務への適用など、様々なテーマで成果が創出されている。Serendie Bootcampを利用した後に、自部門の本番環境にサービスをリリースした開発プロジェクトも多い。

経済的負担なく試作環境を瞬時に利用可能であるため、アイデアを速やかに形にできて、プロジェクトの立ち上げが迅速になる。また、多様なバックグラウンドを持つ参加者が集まることで、異なる視点やアイデアが交わり、新たなイノベーション創出の可能性が高まる。Serendie Bootcampコミュニティーを通じて、同じ目標を持つ各組織の仲間と出会って、将来的なコラボレーションや新事業の創出が期待される。

このように、Serendie Bootcampは、必要なAIアプリケーションを簡単に開発できる試作開発基盤を通じて、サービスや事業の創出、事業効率化に貢献し続けていく。限られたリソースを最大限に活用し、AI人財を育成することで、競争力の向上を図ることができる。この取組みを通じて、更に多くの事業本部がAI化・デジタル化の波に乗って、持続可能な成長を実現していく。

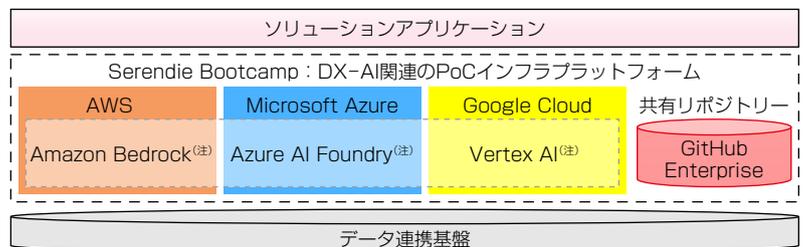


図2 - Serendie Bootcampサービス環境

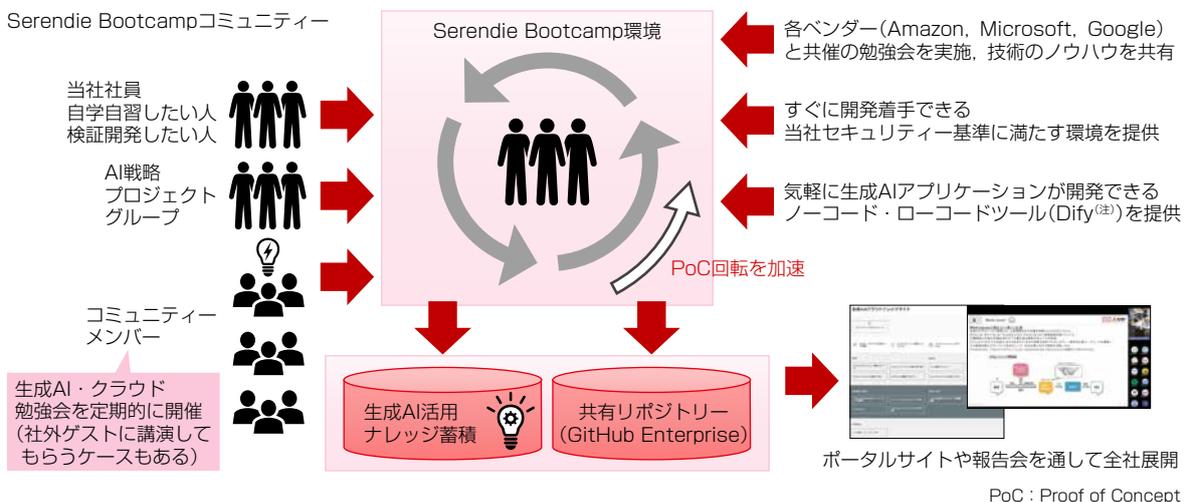


図1 - Serendie Bootcamp全体像